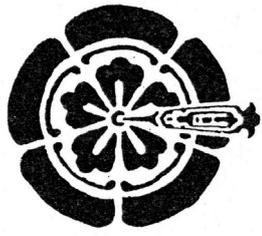


結城秀康に信頼され

加賀藩の抑えとなった 多賀谷左近三経

あ わら市柿原の田園の中にたたずむ「多賀谷左近三経石廟」(あわら市指定文化財)。この石廟の主、多賀谷左近三経のルーツである多賀谷家は常陸国南部、下総国北部(現在の茨城県南部周辺)を地盤とする国衆で、三経はその家の嫡子として天正6(1578)年に生まれています。しかし、家の存続のため廃嫡され分家し、結城家の養子となった結城秀康に仕えました。朝鮮



三経系多賀谷家紋

出兵の際には、肥前国名護屋(現在の佐賀県唐津市)へ出陣し、そこで石田三成を介添えとして元服しました。三成の一字をもらい、三経と名乗ります。同時に左近将監に任官し、以後、多くの資料上では「多賀谷左近大夫」や「多賀谷左近」と記されています。三経とはどのような人物だったのでしょうか。

三経は武勇に優れたほか、蹴鞠を当代一流の飛鳥井雅枝より習得するという風流な一面、豊臣秀吉や徳川家康、秀忠など時の権力者に季節の贈り物を欠かさず送る抜け目なさも持ち合わせるなど、バランスの取れた優秀な人物だったようです。

三経にとつての大きな転機が関ヶ原の戦いでした。この時、三経は結城秀康の先鋒として上杉攻めに下野国大田原(現在の栃木県大田原市)にいち早く布陣し、上杉勢に備えています。この戦機を捉えたすばやい行動に秀康も満足し、褒詞の手紙を与えています。こうした家臣の活躍などもあり、秀康は関ヶ原の戦いの後、越前国68万石を与えられ移封したのです。

三経も常総の地を離れ、越前国へやってきました。慶長6(1601)年には秀康より丸岡領・三国領を中心に3万石が与えられ、柿原村(現在のあわら市柿原)に館を構えます。関ヶ原の戦いの直後でまだ世情が安定していない中、福井藩にとつて最大の任は、加賀前田家に対する備えでした。その福井藩の中でも最北で加賀藩と接する場所に領地を与えられたということは、秀康から相当の信頼を受けていたと言えるでしょう。また、三経が病となった時は秀康から懇ろな見舞いの手紙をもらっています。年齢が近いことなどもあり、個人的にも信頼されていたと推察されます。

地域を治めることにおいては資料がほとんど残っていませんが、あわら市橋屋や樋山にあるため池、滝の「ふたまたつつみ」は三経の時代に作

られたとの伝承があるなど、領国の整備は積極的に行い、その治世は善政だったと人々に記憶されました。

三経は慶長12(1607)年に亡くなり、その治世はわずか6年という短さでした。柿原村の西端に宇墓堂という場所があり、そこに三経の墓が今も残されています。

関連史料・ゆかりの地

多賀谷左近の墓 (あわら市指定文化財・史跡)



史跡・多賀谷左近の墓はあわら市柿原地区の南西の端にあります。笏谷石で作られた多賀谷左近三経石廟(市指定文化財・建造物)、三経の子孫が建てた供養の五輪塔、一族の墓と思われる宝篋印塔があります。
【住所】あわら市柿原 36-40(金津1Cより車で約10分)



多賀谷左近三経蔵器
(あわら市郷土歴史資料館蔵)